

# ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム

—2022年度の報告と授業内フィードバック(3)—

安原 順子

## 1. はじめに

コロナ禍が続く中、国内外では対面授業とともに引き続きオンライン授業も実施されている。外国人への日本語教育分野においても、マルチメディアを使用した同様の授業形態が実施されている。日本語教育関連の学会や研究会、研修会は、まだオンライン開催が主流となっており、日本語教育学会の発表ではICT使用の教育の試みが多数報告されている。国内では、(社)私立大学情報教育協会の主催で「教育イノベーション大会」が毎年開催され、eポートフォリオ、e-learning、iPad、ブログなどを使用した日本語教育の試みも多数報告されている。国外では、近年隔年に対面で開催されていたICJLE日本語教育国際研究大会が、2024年に開催されることになった。日常を取り戻しつつある現状ではあるが、今後もICT使用の授業がなくなることはなく、国内外の日本語教育において、ICTを使用した日本語教育への関心はさらに高まると考えられる。

本研究は、ICTを使用し学習者オートノミーを育てることを目標に、eポートフォリオを使用した日本語教員養成の学習プログラムを構築することにある。また、ICTと対面授業を組み合わせたハイブリッド型（配布レックス型）のプログラムの構築を目指している。1960年代のヨーロッパが発祥地であるとされている「学習者オートノミー」の研究は、近年、アクティブ・ラーニングにつながる言語教育領域としても関心が向けられ、アクティブ・ラーニングは、オンライン授業の一方法として注目されるようになってきている。

本稿では、2022年度の報告と新たな授業内フィードバックについて実践報告を行い、日本語教員養成のプログラムを精査する。

## 2. 研究目的

本研究の目的は、日本語教員養成と日本語学習に資するオンライン上の双方向授業においてeポートフォリオ等を活用し、学生が自律的に学習する学習者オートノミーを育てる授業プログラムを構築することにある。reflective journal（学習ダイアリー）を使用する双方向授業を生かし、海外の大学との間で日本語教員養成と日本語学習に資する双方向授業を実施し、eポートフォリオに学生が提出したreflective journal<sup>注1</sup>や日本語実習教案を質的に分析する<sup>注2</sup>ことで、日本語教員志望者に有効な学習者オートノミーを育てるプログ

(2)

ラムについて研究する。日本語教育・日本語学習において、学習者を主体にしたICT使用の学習プログラムについての研究は、今後もアクティブ・ラーニング、遠隔授業の一形態として大いに期待される研究分野である。

異文化間コミュニケーションにおけるオンライン上の双方向授業とreflective journalの使用については、その効果が質的に分析され、有効性は実証されている。しかしながら、それだけでは、さらに十分な知識と指導力を持った日本語教員の養成にはつながらなかった。そこで、これまでの双方向授業の研究成果を踏まえて、学習者オートノミーを育む「気づき」を得るために、日本語教員を目指す学生にどのようなフィードバックを与えれば良いかを考えた授業モデルを研究対象とすることにし、日本語教員養成に資する学習プログラムの構築を目指すこととした。

### 3. 先行研究

これまでの研究では、海外の大学とICT使用の双方向学習による学習者オートノミーを対象とした研究報告はほとんどなく、したがって授業モデルの構築にも至っていない。本研究は、授業における実践を研究対象とし、海外との交流が増加する中、遠隔授業の一つとしての日本語教員養成の授業モデルを構築するところに独自性と創造性がある。

さらに、本研究は以下のような学術的独自性と創造性を持つ。

①ICT利用の双方向授業を活用し、学習モデルを構築している点。

②reflective journalの使用とそのeポートフォリオ化により、学生自身の「学びの気づき」と「学習者オートノミーの構築」を重視している点。

本研究の成果から、海外の日本語学習機関との学習プログラムを使用した学習者オートノミーを育む、新しい日本語教員養成プログラムの構築とその質の向上が期待できる。

### 4. 学生の気づきと学習者オートノミー

本研究は、日本と海外の大学との「ICTによる双方向授業」を中心に、「学習者オートノミー」の育成に焦点を当てた研究である。近年、日本語教育における日本語の熟達度を知る基準としてヨーロッパ言語共通参照枠CEFRに準じたJF日本語教育スタンダードが取り上げられている。学習者オートノミーは、1960年代のヨーロッパで生まれた概念であり、CEFRには学習者オートノミーを育む取り組みが不可欠とされる。そのため、JF日本語教育スタンダードの実施は、学習者オートノミーの概念抜きでは機能しない。JF日本語教育スタンダードのポートフォリオも、ヨーロッパ言語ポートフォリオを踏襲している。学習者オートノミーを育てるためのアプローチについては、そのひとつに「IT技術を利用したもの」が挙げられている。また、ICTによる外国語教育は、遠隔授業を行うために必要な手段の一つでもあり、国内外における外国人への日本語教育においては、ICTによる

日本語教育への関心が大いに高まりを見せている。

このように関連性があるにもかかわらず、本研究課題のようにこの二つを兼ね合わせた、つまり日本と海外の大学との「ICTによる双方向授業」を中心に日本語教員養成のための「学習者オートノミー」の育成に焦点を当てた研究は少なく、それぞれの特色を活かしていないのが現状である。

本研究では、ICTの利用による学習者オートノミーの育成に関して、新たに以下の3つの効果が期待できる。

- ①学生が主体的に学修し、成果を実感できる。（自己評価）
- ②担当教員も授業の効果や問題点を把握しやすい。（教員による評価）
- ③学生同士の相互評価が期待できる。（相互評価）

特に、本研究課題では、これまでの成果に「学習者の自律性」を助ける授業中のフィードバックを付加したプログラムにも焦点を当てる。いわゆる自分で学んでいける学習者を育てる「学習者オートノミー」に焦点をあてて、さらに双方向授業についての研究を継続・拡張する準備を行った研究である。

## 5. 研究の意義と研究の位置づけ

本研究は、授業における実践を研究対象とし、コロナ禍でも海外との交流が増加する中、遠隔授業の一つとしての授業モデルを構築するところに独自性と創造性がある。

また、研究の成果から、海外の日本語学習機関との新しい学習プログラムの構築と質の向上が見込まれる。さらに、その結果が双方向授業を使用した学習プログラムの構築へとつながる。

研究の成果は、遠隔授業の一形態として、さまざまな学習者主体の学修プログラムにも応用が可能であり、普遍性を持つ研究課題であると考えられる。主役は学習者であり、双方向学習プログラムは学びを促進するツールとして活用でき、学びのネットワークの起点となる。本研究を基礎研究として位置付ければ、さらに双方向学習プログラムの活用方法が拡がり、波及的な効果も期待できる。

## 6. 研究計画・研究方法

### 6.1 研究計画

神戸女子大学と提携校であるニュージーランドのオークランド工科大学（以下AUTと略す）間で、CambasAUT（AUTが管理するe-learningシステム）を使用した双方向授業として、研究対象となる授業の試行と連携教育を3年間行う。3年目を研究完成年度とする。大学3年生を対象に、1年間に2種類の授業を行い、授業を通じた日本語指導者の育成

(4)

方法とreflective journalを質的に分析した結果から学習の有効性を検証する。reflective journalをeポートフォリオの一部として活用し、質的に分析する。また、eポートフォリオの内容をチェックし、必要な助言を与えることで、効果的に日本語教員を育成する方法論を明らかにする。

## 6.2 研究方法

- ・ 学生がeポートフォリオに提出した以下の対象授業のreflective journal、指導案、レポートなどを分析し、自己評価、相互評価、教師による評価を行う。
- ・ 双方の学生は、以下の授業に参加し、毎週各自が学習を自己評価して、その結果をreflective journalとして双方向授業ではmanaba神戸女子大学（神戸女子大学が管理するe-learningシステム）に提出<sup>註3</sup>、常時「学習の振り返り」を行う。
- ・ 神戸女子大学学生は、外国人日本語学習者の使用する日本語から、文法・音声の誤用についてレジュメにまとめて授業で発表し、eポートフォリオとしてmanaba神戸女子大学に提出する。

(1)対象となる授業1:

対 象 者：神戸女子大学…3年生の日本語日本文学演習Ⅱ（日本語教育ゼミ） 7名  
AUT…3年生主体のJapanese Oral Interaction（AUT日本語科の日本語クラス）  
14名

授 業 内 容：双方向授業…AUTonlineを使用し、実施する。

双方向授業のテーマ：「ソトから見た日本人、ウチから見た日本」「海外長期滞在と移住」など。

AUTと神戸女子大学生でグループを作り、グループごとに一つのブログを用意する。

①ブログ使用の授業：文字を使用する双方向授業

AUT学生は2週間ごとに各テーマについての課題作文をブログに書き込む。

神戸女子大学生は、それに対するコメントをブログに書き込む。

②Zoom使用の授業：音声を使用する双方向授業

担当教員がZoomでのインタビューを設定し、ブログのテーマに沿って日本人学生が用意し、ブログ上に書き込んだ質問に答える。毎週、1グループ約15分間の交流を行う。

(2)対象となる授業2：日本語模擬実習、日本語チューター

参加予定学生：神戸女子大学生（上記と同じ）

授業内容：日本語指導の実践…eポートフォリオを通して実習の指導を行い、教育実習案、教材、reflective journalを提出する。本学の特色である古典芸能についての解説も含む。

## ①日本語模擬実習（海外教育実習を含む）

学内、海外でeポートフォリオを活用した日本語教育実習を実施する。

## ②日本語チューター

授業の一環として外国人留学生・研修生対象の1回完結型の日本語指導を毎週行う。指導は、外国人が日本語で「～できる」ことを重視する。また、Plan（企画）、Do（実施）、Check（点検）、Action（改善）というPDCAサイクルを重視し、常に外国人のニーズの変化に対応できるようにする。

その結果を基にプログラム有効性について検証し、さらに改良を加え、構築したeポートフォリオを活用した双方向学習プログラムが他の機関での授業モデルとなるようにする。

## (1)日本語教員養成と日本語学習者のため双方向学習プログラムモデルの構築と検証

神戸女子大学学生:双方向授業などを通し外国人の書いた日本語を読んだり、話した日本語を聞いたりすることや、実際に外国人への日本語指導を通して得た知識や指導力を、eポートフォリオの提出物から振り返る。

AUT学生：日本人学生と接して、日本語学習に対する学習姿勢にはどのように変化があったか。

## (2)双方のreflective journalを質的に分析した結果から考察した学習効果の検証

使用する質的分析は、SCAT（Steps for Coding and Theorization）と称され、言語データを4ステップでSCATフォームに書き込み、さらにストーリー・ラインと理論を記述する。

**7. 学生への授業内フィードバック**

学生には、授業の一環として、双方向授業が終了してから担当するAUT学生の日本語を分析し授業で発表することとしている。これには、以下の大きなメリットがある。

(1)自分で学んでいける学生が育つ

(2)レジュメによる発表をすることにより、レジュメの書き方、レジュメを使用した発表の方法が分かる

(3)さまざまなAUT学生の日本語能力に関する情報を共有し、一般化できる分析力が育つ

(4)学生へ直接フィードバックができる

ここで、授業でのレジュメ使用の発表を通じたフィードバックの例をあげる。

レジュメ発表は、A42枚に次の項目についてAUT担当学生の日本語の誤用を発表する。作成したレジュメは、当日発表前に神戸女子大学manabaの所定の掲示版にアップする。

## ①学習者の紹介

担当するAUT学生のプロフィールを紹介する。

番号	発話者	テキスト	(1)テキスト中の注目すべき語句
1	JS1	ニュージーランドでは、大人になったらハロウィンでは特になにもしないということ。子どもの頃は、友達の家にお菓子をもらいに行っていた様で、その点は日本と似ているなと思いました。 今回で最後のオンラインでしたが、とても楽しく話すことができました。初めは、緊張もあり、どのように会話を続けられればいいのか探りながら話していましたが、回数を重ねる度にだんだん慣れることができました。 これまでの交流を通し、異文化について少し身近に感じることができたと思います。また、アシュリーさんとアベラさんとは、SNSでも繋がることのできたため、この機会でも交流を終えるのではなく、また楽しくお話したいと思ひます。	日本と似ているなと思った 楽しく話すことができた 回数を重ねる度にだんだん慣れることができた 交流を通し、異文化について少し身近に感じることができた この機会でも交流を終えるのではなく、また楽しくお話したい
2	JS2	異文化理解ではないのですが、今ニュージーランドでは昭和の曲が流行っていると知り驚きました。 今まで外国人としっかりと会話する機会がほとんどなかったので新鮮でした。とても楽しかったし、貴重な経験でした。	今ニュージーランドでは昭和の曲が流行っていると知り驚いた 新鮮だった とても楽しかった 貴重な経験だった
3	JS3	季節も食文化も違う人たちとコミュニケーションをとることは本当に少ないので、お互いの意見を交流する事が出来て理解が深まった。やってみるとあつという間でいろんな話が出来て楽しかった。喋り方のくせも一人一人違うところが興味深かった。	季節も食文化も違う人たちとコミュニケーションをとることは本当に少ないので、お互いの意見を交流する事が出来て理解が深まった いろんな話が出来て楽しかった 一人一人違うところが興味深かった
4	JS4	日本の地名や観光地などを皆さんが思っていたよりも知っていたので驚きました。それほど魅力的な場所が沢山あると改めて感じ、嬉しかったです。 Zoomの参加時間に誰も居なかったり、時間が終わっても会話を続けたりと、少し時間にルーズだなと感じる一面もありました。 最初はとても緊張して会話が続くか不安でしたが、4回とも本当に楽しくコミュニケーションを取ることができました。 ニュージーランドに住んでいる学生とZoomを使って会話をすると、という貴重な体験ができ、異文化について新たな発見をすることができました。これからも海外の方と交流できる機会があれば積極的に参加したいなと思ひました。	日本の地名や観光地などを思っていたよりも知っていたので驚いた 魅力的な場所が沢山あると改めて感じ、嬉しかった 少し時間にルーズだなと感じる貴重な体験ができた、異文化について新たな発見をすることができた
5	JS5	時間に少しルーズだなと感じる場面がありました。日本が、しっかりとした律儀な国だなと思ひます。 電車なども時間通りに来るとは珍しい国があるという国も聞いたことがあります。 他の国の方とお話しできるという貴重な体験だったと思ひます。あまりないことだと思ひます。新たな発見をたくさんできました。このゼミに入る事ができてよかったです。	時間に少しルーズだなと感じる場面があった 日本が、しっかりとした律儀な国だと思ひます 貴重な体験だったと思ひます あまりないことだと思ひます 新たな発見をたくさんできた
6	JS6	AUTの方は仕事をしながら大学に通っている人が一定数いるということ。 Zoom越しですが、最後に写真を撮れて良かったです。もう会えないと思うと寂しいです。4回しか関わることはありませんでしたが、すごく楽しかったです。このような機会を与えてくださりありがとうございます。	仕事をしながら大学に通っている人が一定数いる 最後に写真を撮れて良かった すごく楽しかった
7	JS7	ビーガンのレストランとか食事など知りました。 最後ですからちょっと残念と思ひます。また、ラインなどを会話を続けているのがいいと思ひます。	ビーガンのレストランとか食事など知った ちょっと残念と思ひます ラインなどを会話を続けているのがいいと思ひます

表1.2022年度 神戸女子大学学生の reflective journal 分析例

	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉疑問・課題
	日本と似ているところがある 少しずつ慣れる 異文化を身近に感じることができた 今後も話したい	異文化接触により、異なることばかりでなく、共通点もあると分かった 知識を得て異文化を身近に感じる 今後への期待感	異文化との出会いから、共通点もあると新たに気づきを得る 異文化を身近に感じるようになる 交流の継続への期待	異文化との出会いから得られるものはさらにあるか?
	ニュージーランドで、日本の昔の曲が流行る 交流が新鮮で、楽しかった 貴重な経験ができた	新たな発見と驚き 交流が新鮮で、楽しい 今までになかった経験をする	異文化接触により新たな発見と驚き 好感 経験したことのない経験ができた	異文化接触による新たな発見が今後もあるかどうか。
	違う国の人たちと交流できて理解が深まった 楽しかった 興味深かった	交流を通して異文化について理解が深まる さらに興味が湧く	異文化交流を通じて異文化への理解が深まる 興味が湧く	異文化についての理解は、どのように深まり、興味が湧いたのか?
	日本のことをよく知っていたことに驚いた 日本の魅力を改めて感じて、嬉しかった 時間を守らないことがあったことが残念だった 新たな発見があった	日本のことをよく知っている外国人の存在に驚く 日本についての新しい発見をする 時間についての考え方の違いを知る	異文化を知られば、自国についても再発見がある 時間についての考え方の違いを知る	他にも、異文化接触により日本について新たな発見があるか?
	時間を守らないことがあった 日本の良さを感じた 貴重な体験ができた 新たな発見がたくさんあった	時間についての考え方の違いを知る 日本の良さを感じる 貴重な体験 新たな発見があった	時間についての考え方の違いを知る 異文化を知ることで日本の良さを発見する貴重な体験	時間について以外の考え方以外にも、発見があったか。それはどのような知識の獲得に繋がるか?
	日本とは違い、仕事をしながら大学に通っている人もいる いっしょに写真が撮れて良かった 楽しかった	日本と異なる異文化を知る 楽しい時間や体験を共有する	異文化に接し、自国との相違点を確認する 共感を覚える	異文化接触の結果は、共通点も確認できたか?
	ビーガンのレストランなど新しい知識を得た 残念な気持ちがある 今後も交流を続けられたら良い	新たな知識を得る 今後の継続した交流に期待する	異文化について新しい発見をする 今後への期待	その他はどのような発見があったか?

(8)

②書き言葉の分析

AUTオンライン上の交流ブログから、誤用を、抽出し訂正する。

誤用の文章を訂正するに当たり、このAUT学生には日本語についてどのような特徴が見られるだろうか。誤用の訂正は、日本語母語話者にとっては慣れればそれほど困難ではない。しかし、そこから学習者の誤用の特徴を見つけ日本語教育に応用する力は、改めて伸ばすしかなく、教授者としての学習者オートノミーの育成に繋がる。

例えば、AUT学生とのオンライン上の交流から次のような誤用の例が見られる。

a 「な形容詞」の誤用…「な形容詞」を「名詞」と誤用している。

誤用 → 訂正

・好きのクラス → 好きななクラス。

・ひまの時間 → ひまな時間

「な形容詞」は、「名詞」を修飾する場合、

好きな、ひまな…そのまま「名詞」を接続する。

好きなクラス、ひまな時間

好き、ひま…「名詞」の前に「な」を入れる。

好きなクラス、ひまな時間

b 「だ」の誤用、「だ」の過剰使用

・〇〇さんもすきだと思います。 → 〇〇さんもすきだと思います。

・できることが多いだだと思う。 → できることが多いと思う。

前出の誤用文（「だ」の脱落）の理由は文法規則の「過剰般化」によるものである。つまり、

誤用

訂正

・〇〇さんもすきだと思います。 → 〇〇さんもすきだと思います。

・できることが多いだだと思う。 → できることが多いと思う。

「～と思います」に接続する形は、品詞により次のように変化する。

		「だ」の有無
動詞	休む <u>と</u> 思います	×
い形容詞	多 <u>い</u> <u>と</u> 思います	×
な形容詞	好き <u>だ</u> <u>と</u> 思います	○
名詞	学生 <u>だ</u> <u>と</u> 思います	○

表2 「～と思います」に接続する形の「だ」の有無



ところが、このAUT学生はだ「～と思います」の「と」の前がそれぞれ名詞であるにもかかわらず、「だ」を付与していない。

発表を通して、すべての誤用は、同じ理由によって起こることが理解できれば、学生の成長が見られる。

## ②話し言葉の分析

Zoomを使用した交流から、音声の誤用を、抽出し訂正する。音声での誤用については、予めどのような点に着目するかのヒントを与えて分析させた。これらは、学生の母語・家族間での使用言語によって異なるが、概ね次のような項目立てができる。

### c長短音の発音

いところ → いいところ

どよび → どようび

### d促音「っ」の脱落

いなかた → いなかった

ちよと → ちよっと

### e清濁音の発音

たいがく → だいがく (大学)

### fカタカナ語の発音

ニュジランド → ニュージーランド

### gアクセント

おんがく → おんがく (音楽)

## ③まとめ

### 結果の分析と発表者の意見

発表を通して、すべての誤用は、同じ理由によって起こることが理解できれば、学生の教授能力にも成長が見られると考えられる。

## 8. まとめ

本稿における「学習者オートノミーの構築」のための授業内フィードバックを重視する試みは、オンライン上の双方向授業におけるeポートフォリオや発表を活用し、学生が自律的に学習する学習者オートノミーを育てる授業プログラムの構築に寄与できると考える。

本研究の成果により、学習者の学習への意欲の向上とともに、海外の日本語学習機関と

(10)

の新しい学習プログラムの構築が見込まれる。その結果は、双方向授業を使用した学習プログラムの構築へと拡がり、さらに、その成果が「学習者オートノミーの育成」に繋がる。そのためには、教授者には、さらに学習者の能力を伸ばす効果的なフィードバックが必要とされる。

謝辞：本研究はJSPS科研費 JP20K00716の助成を受けたものです。

注

注1 常時、各自が学習を自己評価し、その結果を提出、「学習の振り返り」を行うために使用する。

注2 大谷尚（2011）による。本研究課題のような小規模データ分析に適した方法で、その一部を表1に示す。

注3 神戸女子大学onlineシステム。

参考文献

青木直子・中田賀之編（2011）『学習者オートノミー 日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房

大谷尚（2019）『質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会

館岡洋子（2015）『日本語教育のための質的研究入門』ココ出版

中田賀之編（2015）『自分で学んでいける生徒を育てる』ひつじ書房

安原順子（2022）「ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム —2021年度の報告と授業内フィードバック(2)—」『神女大国文』第33号pp. 95-106

安原順子（2021）「ICTを活用した双方向授業活用の日本語教員養成プログラム—2021年度の報告と学習者オートノミーを育てる授業内フィードバック—」『神女大国文』第32号 pp.55-66

横溝紳一郎、山田智久（2019）『日本語教師のためのアクティブ・ラーニング』くろしお出版